

## 玉名高等学校全日制 平成28年度学校評価表

<b>1 学校教育目標</b>
(ア) 「平成28年度県立中学校・高等学校における教育指導の重点」を踏まえ、本校の三校訓「至誠・剛健・進取」の具現化に努め、徳・体・知の調和がとれた全人教育をめざす。 (イ) これまで積み上げてきた本校の教育方針に基づき教職員が一体となって、家庭や地域との連携のもと活力ある学校づくりをめざす。

<b>2 本年度の重点目標</b>
本年度教育スローガン 「夢実現・可能性への挑戦 ～新たな歴史を刻む～」
① 基本的な生活習慣の確立 ② 教師の授業力向上及び個に応じた学習指導と進路指導 ③ 上記イの実践を推進するための校務全般の効率化・授業改善（学校改革の推進） ④ 特別活動（生徒会・部活動等）を生かし、自主性や創造性、奉仕の精神などの育成 ⑤ 地域と連携した教育活動 ⑥ 言語環境の整備

<評価> A：よくできている B：大体できている C：ややできていない D：できていない

<b>3 自己評価総括表</b>						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	学校の組織力の向上	学校組織の円滑な運営と活性化	・課題・情報の共有化 ・協働意識の高揚 ・コミュニケーションの充実 ・学年部とそれを支える他の分掌や教科の連携・協力	・各分掌・教科の連携 ・管理職への早急な報告・連絡・相談体制の確立 ・管理職から職員への目配り・気配り・声かけ ・職員間が交流を深めるためのレクリエーション等の実施 ・運営委員会の活性化	A	運営委員で意見交換し、他の分掌との横の連携を図りながら、より良い提案を行い、全職員に対しても早めの周知を徹底した結果、教職員による学校評価アンケートの肯定感も84.7%と高かった。職員間での情報共有、意思の疎通及び「報連相」を徹底することにより、仕事の見通しが立てやすくなり、さらに各行事がスムーズに運営されるようになると思われる。
		職員研修の充実	人権教育で3回、進路指導で3年3回、1・2年は2回、ICT活用で1回実施する。	人権教育部、進路指導部（教務とも連携）、情報管理部で立案し、全職員で実施する。	A	各部における研修の回数は目標を達成したものの、職員の要望に沿う研修内容や時期的・時間的な改善は継続して図っていきたい。
	安全な学校づくりの推進	安全点検表による点検と改善	各学期に1回、教室や施設等の安全点検実施。点検率100%を目指す	保健環境部が立案し、全職員で取り組む。	B	2学期は100%点検できた。全職員で取り組み、更に校内の安全確保をしたい。
		緊急事態対応の徹底	危機管理マニュアルの災害時の部分の再点検と防災訓練を実施する。	総務部が立案し、学校全体で取り組む。玉高連絡メールを活用（情報管理部と連携）する。	B	熊本地震を受け、災害避難訓練の際には、負傷者の搬出・対応等を入れ、僅かではあるが、現実的な訓練を追加し実施した。
学力向上	確かな学力の養成と授業の	教科シラバスの作成	評価の観点などを盛り込んだ、次年度に繋がる質の高いものを作	教務部を中心に、教科全体で取り組む。	A	シラバスの統一化をさらに進めることができ、年間指導計画を生徒や転入職員に分かりやすく提示すること

			成する。			ができた。
充実	互観授業週間の設置		2学期に3週間、全教科で実施する。	教務部及び各教科で連携しながら学校全体で取り組む。	B	教科の枠を超えて授業を見学することで、客観的な視点で授業改善を行うことができた。
			各学期に1回、土曜日に実施（7・11・2月を予定）する。	教務部で立案し、学校全体で取り組む。	A	目標通りに実施することができ、学校や生徒の様子を地域や保護者の方にお見せすることができた。
	個に応じた学習指導	宅習時間調査の実施	1・2学期期末考査前と6・10月に全学年で実施する。	教務部で立案し、学校全体で取り組む。	A	全職員に調査内容を周知することで、生徒への学習指導等に役立てることができた。
		生徒理解の推進	クラス裁量LHRや、個人面談時間の確保。生徒情報の共有。家庭訪問を実施する。	教務部が各部と連携して立案し、学年主任を中心に、全クラスで取り組む。	B	年度当初から体育祭までの期間の面談時間は確保できたが、生徒の細かな情報を職員間で十分に共有できなかった。各分掌・学年・教科との連携をさらに深め、情報共有を進めたい。
	習熟度別授業の実施	1・2年の数学と英語、3年の数学と理科で実施する。	教務部を中心に関係教科で取り組む。	B	昨年度よりも習熟度別の授業を増やし、生徒の実態に応じて授業を展開することができた。	
中高一貫教育の推進	6年間を通じた中高一貫教育指導の充実	中高一貫教育を生かしたカリキュラムの構築	2年次の理系に特進クラス1クラスを設ける。	教育課程検討委員会、運営委員会で十分検討し、全職員に周知する。	B	2年次の理系に特進クラスを設置することはできなかったが、全国難関大等への進学を実現するために中進生と高進生の融合を図り、生徒の希望や適性に応じたクラス編成を行い、来年度に向けての方向性が定まった。
		よりレベルの高い授業の展開	学校評価において、生徒の授業満足度が、昨年を上回る。	授業担当者の中高間連携と、積極的にお互いの授業を参観することで、難関大学を見据えた指導力を養成する。	B	シラバスの作成・活用、互観授業週間の設定、教科会、各試験の分析等、生徒の状況を把握しながら、指導力の向上に努めることができた。
キャリア教育（進路指導）	進路希望に応じた学力の向上	コース制の導入	2年・3年で文系コース・理系コースを設定する。	教務部を中心に、学年・教科と連携して取り組む。3年理系コースに特進クラス1クラスを設置する。	B	3年理系に発展クラスを設置することで、難関大受験希望者への対応ができた。今後も学年全体のバランスを考えながら設置について検討していきたい。
		校内実力考査の実施	1年と2年は学期初めに、3年は、9月に1回実施する。	教務部及び進路指導部が中心となり各学年で実施する。	B	3年の実施については、授業時間の確保、実施結果の利用方法などの観点から再検討したい。
	進路意識の高揚	進路講演会はじめ各学年に応じた取組の充実	年2回「キャリア教育講演会」を実施する。	進路指導部で企画し、学校全体で取り組む。	A	講演料の関係で、年1回の実施になったが、講演後の生徒の感想も非常に良く、保護者も300名以上の参加

						で盛況であった。次年度は年2回実施したい。
			キャリア教育「インターンシップ」を実施する。	進路指導部で企画し、2年を対象に実施する。	B	夏休み期間中に県内5病院の協力のもと、一日看護体験を実施した。15名が参加した。春休み期間中には、医療系で実施予定である。
			職業別講話(若駒キャリア塾)を実施する。	同窓会の全面協力のもと、進路指導部が企画し、中学3年と高校1年を対象に実施する。	B	同窓会の協力のもと、12月3日の土曜授業日に実施。本校OB・OGの6名を含む9名の方の講話を聞き、概ね好評であった。次年度は、年度当初から動き、招聘する講師の数も増やしたい。実施時期も再検討していく。
			一日若駒大学(出張講義)を実施する。	進路指導部が企画し、1・2年を対象に実施する。	A	10月20日に実施。生徒は、全18講座のうち2講座を選択して聴講した。昨年の16講座より2講座増え、より生徒の進路希望に対応する形になった。
			大学の学部・学科説明会(ようこそ先輩)を実施する。	進路指導部が企画し、6月に2年を、9月に1・2年を対象に実施する。	A	9月17日の土曜授業日に実施。現在、大学3、4年の文系4名、理系5名の本校卒業生に大学での研究内容など講演をしてもらった。在校生は、自分の進路目標達成への意欲の喚起に繋がった。
			キャリア教育「私の仕事作文コンクール」へ応募する。	進路指導部で企画し、1年を対象に実施する。	A	1年女子が、上位6作品に入る「日本語検定委員会賞」を、1年男子が「テーマ賞」を受賞した。
		進路指導力の充実	各種説明会、進路研究会へ参加する。	進路指導部が立案し、各学年及び進路指導部職員を派遣する。	B	多くの大学の進学説明会や予備校で実施される大学入試研究会に参加し、進路指導を学ぶ良い研修の場となった。
			先進校視察を実施する。	進路指導部と附属中学校が連携して立案実施する。	B	育友会と連携して、中高一貫教育校として実績を上げている、大分県立大分豊府中学校・豊府高等学校を訪問した。
生徒指導	基本的な生活習慣の確立	挨拶及びマナー指導	年間を通じて、学校現場の全ての場面において取り組む。	登校指導・下校指導を生徒指導部で企画し、全職員で取り組む。生徒会各種委員会による挨拶運動を実施する。	B	校内における挨拶やマナーは良くなってきているが、校外での挨拶など改善の余地がまだ多くあり、通学の苦情なども多い。保護者の協力も得られるような啓発を考える必要がある。

		整容指導の実施	学年集会等で整容指導を年6回実施する。日常的な指導を実施する。	検査は生徒指導部で立案し各学年と連携して実施する。全職員で指導する。	A	先生方の場面に応じた適切な指導により、大きく改善されている。整容指導を年間6回実施しているが、来年以降は回数を減らせるように、さらに日々の指導を充実させていきたい。	
		交通安全意識の高揚	登校指導年6回 下校指導週2回 新規単車通学生への免許取得指導を実施する。 単車通学生の実技講習会を年1回、保護者会を年2回実施する。自転車2重ロック点検を毎月1回実施する。交通講話を実施する。	登校指導は生徒指導部で立案し、全職員で実施する。下校指導は生徒指導部が7限授業日に実施する。単車通学生への指導については、地元の企業や自動車学校、警察署と連携した活動を行う。	A	登下校の指導を実施し、啓発活動を行った。また、自転車通学生や単車通学生の集会を開き、その時々の問題点や課題を伝え、事故防止に努めた。二重ロック点検においては、毎月実施し、その度に前月を上回る成果を上げている。重大事故はないが、事故ゼロを目指し、今後とも取り組んでいく。	
	生徒会・部活動の活性化	生徒を全面に出す取組の推進	各種行事等での生徒の自主・自律を促す。	生徒が企画・立案したものを生徒会担当職員を中心に、全職員で支援していく。	A	各種委員会はやるべき仕事を献身的に頑張っていた。しかし、自ら課題を見つけ、生徒の力で解決していくところまでには至っていない。今後も支援を続け、主体的な動きを活性化していきたい。	
		文武両道の推進	練習時間の確保と下校時間を徹底させる。	各部活動顧問との連携及び下校指導を実施する。	B	週2回の下校指導の結果、下校時間は守れている。しかし、その後校門付近に長く残る生徒がいるので、適切な行動を促したい。	
	人権教育の推進	研修の充実と推進体制の機能強化	年間指導計画の作成と校内研修の実施	年度当初に年間計画を作成し、年間3回校内研修を実施。また校外研修へも積極的に参加する。	人権教育部で立案し、全職員で取り組む。人権教育推進委員会にてその都度総括を行い、次年度の計画策定の参考とする。	A	作成された年間計画にもとづき、校内研修を実施しただけでなく、同和教育の法規に関する研修も行った。校外研修の案内も行い、多くの職員が参加した。
		指導方法の工夫改善	教科指導における取組の推進	人権教育の視点を持った教科指導を促す。	教科主任を中心に、「命を大切にすることを育むプログラム」作成において各教科の内容を確認する。	B	教育活動全般で人権教育の視点に立った指導をするよう周知し、各科目においては、命を大切にすることを授業内容で見直した。
HR活動における取組の推進			1年生5回、2年生4回、3年生3回実施する。	各学年の人権教育担当が立案し、学年全体で取り組む。	A	人権教育推進委員会を定期的に開催し、内容の提案や総括、見直しを行った。	

	学習機会の実と指導者の育成	外部講師による講演会の開催	人権教育講演会や職員研修を実施する。	人権教育部が立案し、学校全体で取り組む。生徒の感想等をクラスで取り上げ、内容の深化を行う。	A	特別支援教育の講演では実際に対象生徒を観察しての講話を頂いた。また、1年生を対象に「スマホ・ネットのリスクと対応」について講演を実施した。
		家庭への啓発活動の推進	学年保護者会等における講話と、HPや育友会だよりを利用した啓発活動を実施する。	人権教育部が立案し、学校全体で取り組む。	B	育友会総会で担当から話をし、学校HPを利用して人権教育LHRの内容や感想を周知し、育友会だよりでは「家庭でのいじめチェック」を掲載し、スクールカウンセラーだよりを発行した。保護者アンケートでは「できている」との回答が昨年に比べ、若干増加した。
	「命を大切にすることを育む」指導	自他の命を大切にしようとする姿勢の育成	教科ごとに作成した指導ユニットを中心に、学校教育全般に渡って命の大切さを説く。	全教科で「命」に関わる内容を考えて、ユニットの作成や実践に全職員で取り組む。	B	全科目、全職員で協力して「命を大切にすることを育む」教育指導のユニットを作成し、LHRや授業の内外で命の大切さを伝える取組を行った。
いじめの防止等	いじめの未然防止と早期発見	生徒の意識高揚	6月の「心のきずなを深める月間」をはじめ、年間を通して啓発活動を実施 生徒会からもいじめ根絶宣言をする。	人権教育部が立案し、生徒指導部、いじめ問題対策委員会、生徒支援委員会をはじめ学校全体で取り組む。	B	心のきずなを深める月間では標語を作成し、書道部に墨書して頂いたものを文化祭や校内で掲示した。SNSについても授業での取組や集会での啓発・使い方等の教室掲示を行った。
		職員の意識高揚	「いじめ防止基本方針」の活用促進と研修を実施する。		B	いじめ防止基本方針を職員に周知した。いじめを防止し、早期発見する意識向上をくり返し伝えた。
		生徒理解の推進	相談体制を整備する。心のアンケートの実施、職員研修等を行い、理解を進める。		C	スクールカウンセラーの相談日の増加やスクールカウンセラーだよりの発行、SC・人権教育部の相談日時の教室掲示等を行い、生徒や保護者が相談しやすい体制を整えた。職員全体の生徒情報交換会では顔写真を使いながら年に2回実施した。しかし、学校評価アンケートでは「悩みに親身になって応じている」と答えた生徒は69.2%に留まり、低い評価となっている。

言語環境の整備	読書活動の推進	蔵書の充実と図書館内の整備	選書にあたり、先生方の希望を大いに取り入れる。利用しやすい図書館づくりに努める。	先生方に図書購入希望調査を記入してもらい、意見、アイデアをいただく。興味をひく特設コーナーを設置する。	A	生徒、先生方のリクエストには、基本的に答える形で購入している。先生方の意見をいただき、司書を中心に選書を行った。各種の特設コーナーを設置した。
		朝読書の実施	学期毎に2週間程度、全職員・全生徒で15分間実施する。	図書部が立案し、学校全体で取り組む。1・2学年主導の朝読書と連携を図る。	A	1学期7月、6日間。2学期12月、6日間。3学期2月、4日間実施。1・2学年単位でも年間実施。
		図書だよりなどの発行	月1回以上発行する。	図書部等が立案し、実施する。	A	「考人」は、新刊案内と併せて随時発行。生徒図書委員による「リブダイアリー」も充実してきた。(1・2学期)
	書く力の育成	小論文指導の推進	各学年とも総合的な学習の時間で「小論文作成」に取り組む。	各学年と進路指導部が連携企画し、学年全体で取り組む。関係職員の意見を聞き、最新の入試テーマに基づいた小論文資料(本)を充実させる。	B	各学年の小論文担当が、小論文模試を計画し、各学年ごとに講師を招聘し、講演会を実施した。特に3年生は、年3回実施した。また、小論文入試対策指導は全職員で行っている。今後は、3年間を見通した「生き方指導」を実践していくための小論文指導体制を構築していきたい。
			環境教育の推進	学校版環境ISOの取組	学期毎の環境週間(エコチェック・美化チェック)の取組を徹底する。	保健環境部が生徒指導部と連携・立案し、学校全体で取り組む。
	保健環境指導	環境教育の推進	温暖化防止への取組	省エネ・省資源に取り組む。	保健環境部が立案し、学校全体で実施する。	A
健全な心身の育成			健康診断後の治療率向上	保健だより・治療勧告書で定期的に治療を促す。	保健環境部で企画し、各学年で取り組む。	B
外部講師による講演会の開催		性教育講演会(学年別に1回、年間計3回)を開催する。	保健環境部で立案し、全学年で実施する。	A	各学年単位の実施は効果的であることが窺える。更に充実させたい。	
保護者	育友会との連携	育友会だより作成の支援	定期発行版及び臨時発行版のための資料を提供する。	総務部が中心となり、全職員で対応する。	A	広報委員会との打合せで、計画的に仕事が行われるようになり、原稿依頼・入稿がスムーズになった。
		体育祭・若駒祭・小岱山一周大	学校との役割分担の明確化と連	総務部が中心となり学校全体で取り組む。	A	事前に準備・打合せを行い当日は連携して行事での各

地域住民との連携	会での連携	絡体制を整える。			役割を行うことができた。
	育友会総会や地区懇親会等での連携	学校からの説明資料を工夫し生徒活動場面を紹介する。	総務部が中心となり学校全体で取り組む。	A	熊本地震後、延期した総会では資料の製本等、職員全体で協力して準備し、例年通りの総会を開催できた。
	地域への開放	学年保護者会時の公開授業、夏休みの学習支援活動を行う。 (地域児童)	各担当を中心に全職員で取り組む。	A	公開授業を毎学期実施することで地域や保護者の方に学校の様子をお見せすることができた。今年度も地域児童対象の「学びたいっ子応援隊」を夏休みに実施した。参加児童を上回る多くの生徒が協力してくれた。
地域への貢献	ボランティア活動の推進	年10回程度、ボランティア委員会を中心に活動を実施する。学年毎の取組を推進する。	ボランティア委員会を中心に、学年及び全体に呼びかけ活動する。	A	昨年度から「地域清掃活動ボランティア」を実施している。毎回多くの生徒の参加があり、定着してきた。無理なく継続していく工夫を生徒とともに考えていきたい。

#### 4 学校関係者評価

平成29年2月16日に学校評議員会及び学校関係者評価委員会を実施した。以下のような御意見をいただいた。

<評価いただいた点>

- ①分析結果を学校運営に生かしていこうという視点が学べて大変良かった。
- ②本当の話を率直に語り合える場づくりに敬服いたします。
- ③丁寧な分析を行っていただきありがとうございます。先生方の日々の頑張りが成果として表れつつあると思います。
- ④先生方の日々の努力には頭が下がります。
- ⑤とても興味がある行事が思ったよりたくさんあります。子供たちにとっては至れり尽くせりという感じがしますが、先生たちは大変だろうと思ってしまいます。
- ⑥先生方が厳しく取り組んでおられることを評価から感じました。
- ⑦中学のうちの大学の体験講義受講は、自身の将来を考える良い機会です。

<課題点>

- ①進学校の特色を生かしながら、子供の全人格的教育に、より一層努められますことを願っています。
- ②今後とも小中校長会と連携を取っていただければありがたいです。玉名高校の更なる躍進を期待しております。
- ③反省すべきは真剣に検討されて、正直な数字に表れる部分の奥にあるものに立ち向かっていただきたいと思います。
- ④附属中での取組と全日制での取組の連携がどうなのかと思いました。中高一貫教育校での特色を生かしての支援をお願いしたいと思います。
- ⑤中高一貫教育校ならではの取組をもっと前面に押し出していくことが、附属中への入学希望者数を増やしていくことになると思います。今はまだあと少しだと感じます。
- ⑥「玉高に入学して非常に良かった」と感じる生徒が年々減少していることに関し、各々の理由を聞いてみたいと思いました。
- ⑦保護者が「わからない」と多く回答された部分に関しては、学校側からの積極的な発信をお願いします。
- ⑧高校が力を入れている活動を保護者のほとんどは深く知らないと思います。どんどん学校側から発信していいと思います。その資料を作るのも大変だと思いますが・・・。
- ⑨保護者の意識をもっと向上させることが今の課題であると切に思います。

## 5 総合評価

### (1) 学校教育目標

- ・徳・体・知の調和がとれた全人教育をめざす中で、学業と部活動の文武両道をひとつの目標としているが、今年度も運動部、文化部ともに九州大会や全国大会に出場するなど、幅広い分野で活躍した。
- ・学習面については、昨年から引き続きのテーマである「個に応じた指導」という点では、保護者・職員・生徒の全てにおいて肯定感が上昇した。3年特進課外や3年発展クラスの設置、模擬試験対策層別の課外等、きめ細やかな対応を今後も継続的に実践していきたい。

### (2) 本校重点目標

- ・「見えない学力」としての基本的生活習慣は確立してきたが、校外におけるマナー等について、今後の改善が必要である。自家用車の学校周辺での送迎、自転車・単車通学生の交通ルール遵守など、継続して取り組んでいくべきことは多い。
- ・生徒会の活性化は今年度も評価が高い。体育祭や文化祭をはじめとして様々な行事に関して自主的に考え行動し、他の生徒たちをリードしている。ホームページや育友会だより等を通して、これらの活動の様子を発信する工夫が継続して必要である。
- ・月に1度の学校周辺における地域清掃活動ボランティアや、部活動生による毎朝の掃除、夏休みの地域小学生への学習ボランティア、熊本地震復興ボランティアなど、地域へ貢献できるよう努力している。しかし、これに対する保護者の認知度は低く、約15%の保護者が「わからない」と回答している。また、土曜授業において、公開授業を3回実施し、多くの保護者や地域の方に学校をより知っていただく機会となった。

### (3) 自己評価総括表に対する評価

- ・学校組織の円滑な運営と活性化のため、運営委員会で意見交換を行った上で、より良い提案を、全職員に早めに周知徹底した。その結果仕事の見通しが立てやすく、各分掌間のコミュニケーションや情報の共有化が進み、行事運営がスムーズであった。職員の肯定感も84.7%と高い。
- ・人権教育講演会や職員研修の実施等において、充実した取組ができた。生徒支援委員会も年に4回開催し、問題を抱える生徒の把握や生徒への支援を進めることができた。また、スクールカウンセラーの活用度も非常に高く(月3回 1回につき4時間)、職員に対して、指導の困難な生徒や悩みを抱える保護者に対するアドバイスもいただいている。しかし、「個々の悩みの相談に親身になって応じている」という項目に対する生徒の肯定感は69.2%と下降しており、個々の生徒に対する気づき等、素早く対応することが必要であると思われる。
- ・進路意識の高揚のため、職業別講話、出張講義、大学の学部学科説明会など多くの講演会を実施し、生徒も多くのことを学ぶことができた。特に、キャリア教育講演会は昨年に引き続き好評で、保護者も多数参加された。
- ・言語環境の整備という観点から、朝の読書の期間を学期に4～6日間程度設けたが、段々と定着しつつあり、生徒が落ち着いた朝を迎え、学校図書館に足を運び読書することが習慣化し、貸し出し数増加につながった。しかし、この期間中の日課の変更や学年連絡の不徹底など、改善すべき点も多い。

## 6 次年度への課題・改善方策

- ・中高一貫教育校として6年目を終え、附属中1期生が卒業した。ここから本校は、「新たな歴史を刻む」をテーマに、変化すべく校務全体の効率化・授業改善すなわち「学校改革」を推進している。土曜授業や課外授業等の見直しを図り、来年度から実施していく。6年間を見通したカリキュラムの編成や、各教科における中高連携という部分で、まだ組織的な取組が十分にできているとはいえない。中高の職員が共通理解を持って生徒の学力を伸ばすことができるように、柱となるものを完成させることが喫緊の課題である。
- ・「県北の進学拠点校として、心を育て、全国難関大学等への進学を実現する」をS Iと掲げていることから、今年度の3年生である中進生1期生は高進生との融合を図り、進路希望別のクラス編成や、理系発展クラスを設置した。来年度も継続して行う予定である。また、S Iを実現するためには、各種研修会への参加や大学入試問題研究など、個々の職員においても、更に学校としても授業力及び進路指導力を強化していく必要がある。
- ・来年度より、学校運営協議会が設置され、本校も防災型コミュニティスクールに指定される。保護者、地域住民、自治体、関係行政機関と協力して「地域とともにある学校」に転換するためには、上記の方々とのこれまで以上の連携が不可欠になる。
- ・保護者への学校評価アンケートにおいて、「わからない」と答えた割合が10%を超えたのが14項目中7項目あり、昨年より増加した。学校行事や人権教育、ボランティア活動、カウンセラーの活用状況、図書館の取組など、ホームページや育友会だよりなどを通して情報提供してはいるものの、実際は十分に家庭に届いておらず、これまで以上に情報発信の方法に工夫が必要である。

